小特集 〈移動〉を描く

〈移動〉を描く

―『「グアム育ちの日本人」のエスノグラフィー：新二世のライフコースと日本をめぐる経験』を起点に ―

森　田　次　朗

1　はじめに

本小特集は、2022 年 12 月 19 日に中京大学大学院社会学研究科で実施された学術講演会、「〈移動〉[1] を描く：『「グアム育ちの日本人」のエスノグラフィー』を起点に」での議論をふまえ、当日の報告者である 3 名（髙橋、森田、芝野）が、各自の問題関心を発展的に論じるものである。

中京大学大学院社会学研究科では、例年、学外研究者にゲスト講義を依頼し、大学院生、及び、教員の研究能力・環境の向上に努めている。2022 年度は、本学教員の芝野が単著（芝野 2022）を出版したことから、本書のテーマに関連した企画を実施ですることが、教員の間で話題にあがっていた。そうした折に、芝野から森田に、東京大学大学院教育学研究科特任研究員である髙橋薫氏を紹介してもらう機会があった。

髙橋氏の研究テーマは、南東ロンドンで暮らす日本人女性のケア実践とコミュニティ形成に関するフィールドワークであり（Takahashi 2022a, 2022b など）、海外に移住した日本人研究という点で芝野の研究テーマと

---

[1] 本小特集の解題、及び、他の論考（髙橋 2023; 森田 2023; 芝野 2023）では、人々の移動について論じる際に、「〈移動〉」と表記する。このように〈 〉をつける理由は、人々の移動経験を「物理的移動」だけでなく、それ以外の「象徴的移動」（塩原 2017: 48-50）をも含み込むものとして捉えており、こうした移動概念のもつ多義性を表すためである。また、本小特集では、existential mobility を「実存的移動」と訳出する。その理由は、本概念は、これまで人類学や国際移動研究のなかで「存在論的移動」と翻訳されることが多かったものの、ontology（存在論）との混同を避けるため、実存的移動と呼ぶことにする。詳細は、芝野（2023）及び森田（2023）を参照。

まさしく合致していた。また、本学教員の森田は、ちょうど2022年8月末からロンドンで在外研究に従事していたため、英国を対象にした社会調査の可能性に大いに関心をもっていた。こうした経緯から、本研究科では、ぜひ髙橋氏にゲストスピーカーとして当該講演会での話題提供をお願いしたいという話になった。その結果、髙橋氏には講演会への出席をご快諾いただいたうえ、講演会当日は、髙橋氏が国際移動研究や日本人研究に内在的な視点からコメントをするとともに、森田が外在的な視点から、その応用可能性についてコメントすることが決定した。

その後、髙橋氏と芝野、森田の3名により、事前打ち合わせを進めていくなかで、講演会の主題は、単純な書評会ではなく芝野（2022）で提示された論点を手掛かりに、人々の多様な〈移動〉を記述することの課題と可能性について議論することで合意し、その方向性で各自が準備を進めていった（表1）。

表1　事前・事後打ち合わせの詳細

回　数	日　程	内　　容
第1回	2022年10月6日	顔合わせ・企画の検討
第2回	2022年10月26日	講演会の内容の検討1
第3回	2022年11月28日	講演会の内容の検討2
第4回	2022年12月12日	本番前の最終打ち合わせ
第5回	2023年3月31日	事後打ち合わせ

そして講演会の当日は、討論者である髙橋氏と森田が、自らの専門領域（移民研究、ジェンダー研究、コミュニティ研究、不登校研究、オルタナティブ教育研究等）に引きつけながら、芝野（2022）の論点、すなわち、①〈移動〉の理論枠組み、② エスノグラフィーの方法論、③〈移動〉概念の応用可能性の3点について問題提起をした後、著者本人から応答を受けるという形で積極的に意見が交換された。

2　各論考の解題

上述の議論をふまえ、3名の報告者が取り組んだ成果が、本小特集で掲載されている各論考である。詳細は、各論考を直接参照していただくとして、要点を筆者なりに説明すると下記の通りである。

まず髙橋氏は、「トランスローカリティはどのように〈移動〉を描けるのか」というタイトルのもと、近年、国際移動研究や地域研究の領域で注目を集めている「トランスローカリティ」の観点から、芝野（2022）により提示された「グローバル化する社会における〈移動〉の多層性」について考察を深めている。本稿の議論でとくに注目すべきは、トランスローカリティとは、けっして「トランスナショナリズムに相反・置換する概念」ではなく、「動的でグローバルな〈移動〉の中で見過ごされてきた静的な状態への理解を補完する役割を果たすこと」が期待される概念だと明言されている点である（髙橋 2023）。つまり、ローカリティとは、社会的関係性の中でたえず更新されうるものであると同時に、移民コミュニティもまた、エスニシティによってのみ形成される一枚岩なものではない。その意味で、トランスローカリティの概念は、〈移動〉を理解するための概念的枠組みにとどまらず、その過程を記述する研究者にとって、対象と自己との垣根を越境する「複眼的なアプローチ」としても重要という髙橋氏の主張は、従来の国際移動研究やトランスナショナリティ研究が看過してきた論点を再考するうえで必要不可欠である。

次に、森田は、「教育社会学における〈移動〉をめぐる諸概念の応用可能性――実存的移動／グローバル・ノンエリート／ホーム」というタイトルのもと、〈移動〉をめぐる論点として、芝野（2022）で提示されている3つのキーワードに注目し、自らの専門領域である教育社会学の関連分野、すなわち、オルタナティブ教育研究、不登校研究・シティズンシップ教育研究、居場所研究における応用可能性について考察を加えている（森田 2023）。なかでも、メインストリームの学校以外の学びの場（フリースクール等）で観察される子どもたちの「紆余曲折」と呼ぶべき経験を、本

書の終章で提示されている「実存的移動」の概念を用いて記述することで、「多様な〈移動〉を忌避する日本の学校文化のあり方」を批判的に検討できるという主張は、従来のオルタナティブ教育研究の視点を再検討するうえで重要だと思われる。

最後に、本書の執筆者である芝野は、「教条的ハイブリッド主義を超えて――〈移動〉する人々の帰属をめぐる経験を描くために」というタイトルのもと、芝野（2022）のなかでは、必ずしも十分に展開されていなかった方法論上の課題を取り上げ、反省的に分析している。具体的には、芝野は、本論考のエピグラフにある、「日本人っていう人種は世界で一番だと俺は思ってる」という語りを議論の端緒とすることで、異文化間教育をはじめとする先行研究において、アイデンティティや帰属意識をめぐる「混淆的なもの」に価値を見出そうとする研究上のスタンスを「教条的ハイブリッド主義」と呼んでいる。そのうえで、こうした研究者のスタンス（戦略的本質主義や対話的構築主義）がはらむドグマ性と、それを乗り越えるための方策、すなわち、「本質主義からの脱却やハイブリッド性の探究を自己目的化しないこと」の重要性について論じている（芝野 2023）。とりわけ、自身のフィールドワークの経験を振り返りながら、帰属をめぐる経験に「耳を傾けること」、その際、「グアムと日本における／の間にある社会的･歴史的な諸力」に注目し、フィールドで出会う人々の「弱い部分（排他性や閉鎖性）」も含めて、その生きられた経験を描くことの意味が詳細に分析されている点は、きわめて重要である。なぜなら、こうした姿勢は、民族アイデンティティやトランスナショナリズムを研究テーマとする者に限らず、あらゆるフィールドワーカーにとって、問い続けられるべき課題だと考えられるからである。

以上みてきたように、髙橋氏と森田の論考は、芝野の著作で提示された論点を出発点としながらも、両者の問題関心に即してより発展的に論じるものである。また、芝野自身も、事前打ち合わせと当日の議論をふまえ、本書の方法論的な立場を再帰的に掘り下げている。ただし、これらの論考

には、小特集という企画の関係上、紙幅の制約があり、やむなく別稿で論じざるをえないテーマがあった。そのため、今後は、各論者によるさらなる議論の発展が期待される。

3　本書の概要

最後に、本小特集は、芝野（2022）の議論が前提とされているため読者の利益を鑑み、本書の構成と要旨を記載しておく。

第Ⅰ部「トランスナショナルな育ちの過程」では、新二世のグアムでの生活経験が、親世代である新一世の移住経験および子育て実践と関連づけて検討されている。

第一章では、親世代（新一世）の移住経験が、移住動機、移住経路、移住後の生活にわけて記述される。具体的には、より良い生き方を追求してグアムに移住した親世代が、その特徴として、1）「個人化された移住」を展開していること、2）社会経済的に不安定な立場にある「若年ノンエリート」として移住してきたこと、3）移住後も日本や現地の日本人社会とつながりを保持しつづけていることが、詳細に明らかにされている。

第二章では、そうした移住経験をもつ親世代が、どのように子世代（新二世）を育てているのかが、言語使用・文化伝達、学校選択、進路希望という三つの側面から分析されている。とくに、自身の移住経験を踏まえ、子ども に「やりたいことを見つけてグアムから出る」ことを望み、グアムへの同化を回避しながら、日本語や日本文化の修得を徹底する様子が描かれている。

第三章では、そのような親世代のもと、子世代である新二世がどのようにグアムで育つのかが多面的に記述されている。まず、かれらが日本と密接につながりながらグアムで生活する姿が明らかになる。次に、そうしたトランスナショナルな育ちの過程で、グアムにおける限定的なライフチャンスや周辺化された立場に否定的な感情を抱き、一方で親の教育戦略などの影響を受けながら、日本に対して憧憬や望郷の念をもつようになる様子

が描かれる。そのうえで、ライフスタイルの追求やルーツの確認を目的に、「グアムを出て日本に帰る」という進路を選択することが示されている。

第II部「帰還移住をめぐる経験」では、大学進学を通じて日本に帰る新二世と就職を通じて日本に帰る新二世が取り上げられ、それぞれの移住過程が比較検討されている。同時に、帰還移住に関心のない者が取り上げられることで、新二世の間にみられる日本との距離の取り方の多様性が示されている。

まず第四章では、日本の大学を目指す高校生に焦点を当て、進学ルートを通る帰還移住の特徴が検討されている。具体的には、かれらがなぜ、どのように日本への進学を選択したのかが明らかにされる。同時に、進路選択をめぐって様々な問題を抱えつつも、帰国生入試を巧みに利用することで、「グローバル人材予備軍」として日本に接続される新二世の姿が描かれている。

第五章では、日本での就職を目指す若者に焦点を当て、就労ルートを通る帰還移住の特徴が検討されている。具体的には、労働者として帰還を試みる新二世が、どのように日本に接続されていくのかが明らかにされている。また、日本とグアムの双方の構造的・制度的制約の中で、日本から排除されグアムに引き戻される「グローバル・ノンエリート」としての新二世の姿が描かれる。

第六章では、帰還移住に関心を示さない新二世に焦点を当て、かれらが日本から距離を置く背景が「ディアスポラ性」という概念を手がかりに分析されている。具体的には、トランスナショナルな生活経験が日本に対する親和性を弱める場合があること、そして、日本との距離の取り方が、様々なライフイベントに影響を受けて変化することが明らかにされる。

第III部「ホームづくりの実践」では、グアムと日本を行き来する新二世が、自分にとって居心地の良い「ホーム」をどのように創造していくのかが検討される。

まず第七章では、日本の大学に進学した新二世の事例が取り上げられ、

かれらが帰還移住後、どのように日本でホームをつくり出していくのかが明らかにされている。そこでは、日本とグアムにおけるネットワークの質と量や、進学先や居住地域の背景の違いが、日本でホームを持てるかどうかを左右することが示されている。

つづく第八章では、日本での就職を目指したがグアムに引き戻されてしまった新二世が取り上げられ、かれらのホームの創造過程が多角的に明らかにされている。とくに、複数の社会における歴史的文脈や構造的制約と交渉するなかで、新たな価値観や社会関係を創造しながら居心地の悪いアウェーをホームに変えていく姿が詳細に描かれている。

終章では、本書全体の知見を踏まえ、日本人の海外移住の多様化・大衆化がもたらした帰結について議論されると同時に、残された課題と今後の展望についても言及されている。

[謝辞]

本研究の一部は、2022 年度中京大学内外研究員制度（在外研究員）の助成を受けたものである。また、本小特集に寄稿してくださった高橋薫氏と芝野淳一氏、及び、学術講演会の当日にご出席いただいた本学の大学院生をはじめとするオーディエンスの皆様と本学教員の皆様に、執筆者を代表して心より御礼申し上げます。

［文献］

森田次朗 , 2023,「教育社会学における〈移動〉をめぐる諸概念の応用可能性――実存的移動／グローバル・ノンエリート／ホーム」『中京大学現代社会学部紀要』17（1）: 105-21.

芝野淳一 , 2022,『「グアム育ちの日本人」のエスノグラフィー――新二世のライフコースと日本をめぐる経験』ナカニシヤ出版 .

芝野淳一 , 2023,「教条的ハイブリッド主義を超えて――〈移動〉する人々の帰属をめぐる経験を描くために」『中京大学現代社会学部紀要』17（1）: 123-35.

塩原良和，2017，『分断と対話の社会学――グローバル社会を生きるための想像力』慶應義塾大学出版会株式会社.

Takahashi, Kaoru, 2022a, "'Care-ful' Boundary Negotiation: Curating translocal subjectivities among Japanese Women in London," *Health and Place*, 78: 102907.

――――, 2022b, "Navigating everyday life in a middle-class neighbourhood: The ongoing negotiations of Japanese women migrants in southeast London," Shanthi Robertson and Rosie Roberts eds., *Rethinking Privilege and Social Mobility in Middle-Class Migration*, London: Routledge, 148–66.

髙橋薫 , 2023,「トランスローカリティはどのように〈移動〉を描けるのか」『中京大学現代社会学部紀要』17（1）: 97-104.